楽しい学び de クラスをつくる

Vol.03

大滝 文平

ごま、面白いわよ！

I先生：「ねえ先生！久しぶりの１年生担任ですね。
今年の生活科は何（植物）を育てるの？」
大　滝：「えっ、まだ何も決めていませんよ。確かに…どうしようかな？」
I先生：「あのね、『ごま』面白いわよ！」
大　滝：「『ごま』？へー、育てたことないなー」

以上、年度初めの作業中に話しかけてきた（大ベテランの）栄養教諭（I先生）とのたわいもない会話から。

○「教材研究」は楽しい時間！…になっていますか？

「先生は社会科や総合的な学習の時間の材って、どうやって見つけてくるのですか？」

よく受ける質問ですが、それぞれにエピソードがあります。出会った材を吟味して子どもとともにつくり上げた単元は、私にとって映画の作品のようなものです（言い過ぎ!?）。それぐらいの愛着があります。当然のことながら、「もっと工夫ができた」「取材が足りなかった」などの反省はありますが、映画と違うのはリニューアルできることではないでしょうか。違う子どもと同じ材で新しい単元を構築する、また新たな魅力が見えてきます。

今回は「教材研究」について考えていきましょう。教師の多忙な仕事は、この「教材研究」の時間が確保できない、と言われます。しかし、この時間を積み重ねていくことが、自身の教師像をつくり上げていく力になることでしょう。次ページから、「材との出会い」「単元化へのヒント」について、エピソードとともにそのエッセンスを紹介します。どれも、「楽しみながら」が根底にあります。まずは、「ごま」の話の続きから！

本資料は、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

◆ vol.03も！

子どもの姿を通した
「教材研究」のエッセンスが
いっぱい！

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！
日文 検索

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更
または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

1. 材との出会いあれこれ！

Case① 始まりは給食の場面で 生活科「ごまの？」

１年生の学習がスタートして１ヶ月くらい経った頃、給食の時間での一コマです。一人の子が言いました。「とうもろこし、とても美味しいね。どこで穫れたのかな」
大滝「では、Ｉ先生に聞いてみようか」

とうもろこしが北海道産だったことがわかり、嬉しくなった我が学級の子どもたちは、毎回の給食で産地を聞きにいくことが日課となりました。私はすかさず日本地図を掲示して、その産地を書き込めるようにしました。そんなある日、「今日のビビンバ、みんな何を聞く？」、自然と声が挙がります。すると、「ごまを聞こうよ！」の声。しかし、「ごまは野菜じゃないからダメだよ」「だって、ごまは工場でつくっているんじゃないの？」、中には、「おへそのごまだよ！」なんて声も聞こえてきます。

「これだ！」この時にあの場面がよみがえります。私はすかさず、Ｉ先生のもとへ先回り。

「この後、子どもたちが『ごま』の産地を聞きにきます。自分たちで調べてみるようにお声かけを！」

こうして、本学級での単元化（単元名「ごまの？」）となりました。この活動は、３種類のごま（黒ごま、白ごま、金ごま）を育てたあと、食品油会社のご協力のもとでごま油を抽出することへと発展していきました。

このように、Ｉ先生との何気ない会話と、食育の価値や産地の知識を広げる機会を子どもの関心から保障したことで単元が生まれることにつながったのです。ごまは２m近くに生長します。夏場に台風が近づいた時、子どもたちが手を取り合って花壇の周りをバリケードのようにして、ごまを守っていた姿が今でも忘れられません。

※写真はイメージです。

Case② 異動初日＆子どもの問題行動から！ 総合的な学習の時間「ずいずいずいどう橋」

異動が決まり校長先生との面接に行く途中でのこと、通学路である隧道を通ると、照明は薄暗く、壁は落書きだらけ。「あまり通りたい道ではないな。いつか改善できる学習ができたらいいかも」と、思いつつもこれからの面接への緊張が高まっていました。

それから３年後。６年生の担任として過ごしていたある日（5月下旬）に事件が起きました。

「先生、放課後にＡさんたちが公園で遊んでいた時、ブランコにいたずらしたまま帰っていきました」Ａさんは素直に認めます。

「すみません。すぐ直しに行きたいです」と、私に訴えます。「では、私も行くからクラスのみんなに事情を説明しないといけないね。校長先生にも」すると、「Ａさんがやったことは地域に迷惑をかけたから、これはクラスの問題。だから、全員で公園に行かせて欲しい」と、想定外の子どもたちの声が挙がります。

校長先生に許可を取り、みんなで公園に行きます。すると、Ａさんのいたずらは元通りになっていました。

「地域の人が直してくれたんだ」
「公園に恩返しができないかな」
「でも、この公園、いつもきれいに整備されている」

みんな、うなだれながら学校へ戻ります。私は、地域を思う子どもたちの気持ちを大切にしたいなと思った時、「これだ！」私は、帰るルートを少しだけ変えて、あの隧道を通ります。

というわけで、子どもが隧道の落書きや汚れに着目し、地域への恩返しと、在校生やこれから入学する後輩たちが安全に楽しく通ることができるように願って、本単元が立ち上がりました。Ａさんは「ぼくはこの学習を最後まで頑張りたい」と決意をみんなに伝えました。その後、区の土木事務所とのタイアップで落書きを消し、さらにオリジナルの絵を描きました。

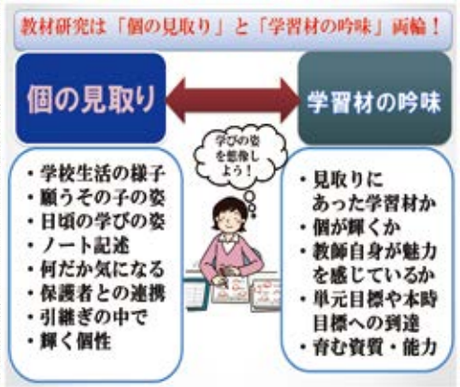
2. 単元化へ向けて

1 「材」と「子どもの思い」が向き合う瞬間を逃さない

材との出会いの Case①、Case②とも、子どもの姿が決定打になっています。「これだ！」の場面ですね。魅力的な教材と子どもの「学びたい！」思いが向き合うことで、主体的な学びが始まることでしょう。その場面を逃さないためにも、日頃から、❶材へのアンテナを張ることはもちろんのこと、❷子どもの思いを見取り続けること。二つが両輪であることが大切です。

「vol.02（前号）」で「『教材研究』と『子どもの見取り』はセットにして考える」と表したのはこのことです。

また、教科学習では子どもの思いだけではなく、単元目標や本時目標に到達する子どもの姿をイメージすることも大切です。指導要領を手に取る機会が正にこの時、この積み重ねがあなたの教科への専門性を高めることにつながります。これまでの話を図で表すとこのようになります。



さらに、同僚と教材について話題にすることで、視点が広がることでしょう！

2 子どもが学ぶ姿を具体的にイメージ「ラフスケッチ」や「構想図」を描いてみる

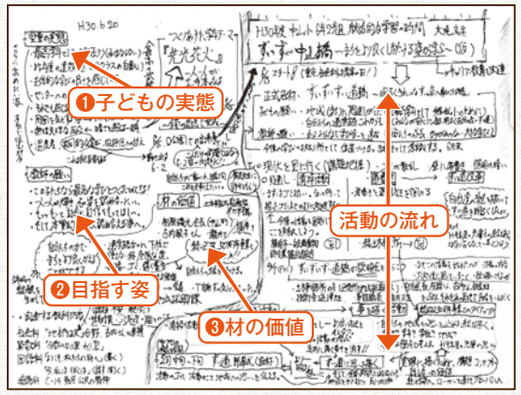
材と子どもの思いが向き合ったら、あるいは向き合う前に、自分なりの構想図を描いてみましょう。描き方は自由！そして楽しみながら！

私は、❶子どもの実態、❷目指す姿、❸材の価値は必ず書き入れるようにしました。もう少しかみ砕くと、❶この子たちはこんなよさや課題がある、❷だからこんな子になって欲しい、❸そのためにこの材だとこんな良さがあると、❶～❸を連動して考えるようにしています。

さらに、Case②の総合的な学習の時間のような大単元の場合は、ある程度の時期をイメージして、具体的な学習場面を描いてみましょう。

学びの道筋も一つに絞らずにいくつか想定しておくことで、子どもの思いに沿った柔軟な学びが展開できることでしょう。参考までに、Case②の構想図をご覧ください。

▼Case②の構想図



1枚でまとめることをオススメします。適宜修正してブラッシュアップ！

次ページでは、教材研究の関連を中心にした実践を紹介！

ぜひ、ご自身の関心ある教科・領域で年間に一度、教材研究を通した、オリジナルの単元づくりに挑戦してみませんか。「子どもの見取り」とセットで捉えることで、子ども理解と教科・領域の研究が深まることでしょう。次ページからは、５年生のＹさんの日常の姿と教材研究の関連を中心にした実践を紹介します。今回は私、大滝の実践です。「我が国の国土の様子と国民生活」の項目で、暖かい地方の暮らしについて取り上げた場所は…八丈島！ご存じですか？さて、都道府県はどこでしょう？

（横浜市立箕輪小学校　大滝 文平）

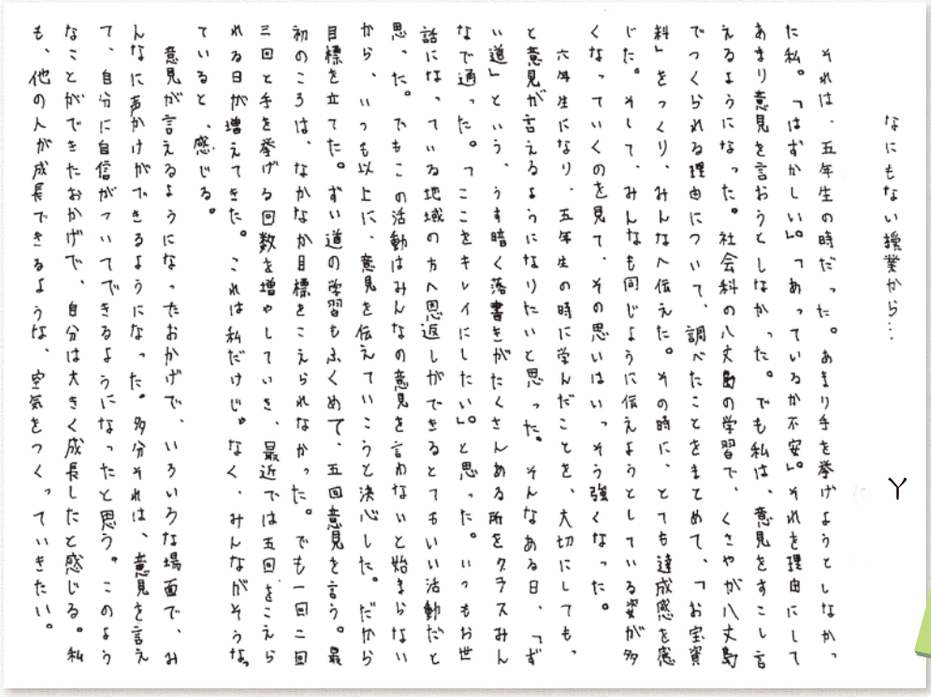
子どもの姿を通した教材研究から学びをつくる！

今回のポイント！
子どもが考えたくなる教材と出会う！
見取りを通して子どもが変容する姿！

5年生　11月中旬～12月実施

単元名　東京都「亜熱帯区」八丈島
（全8時間）

〈実践者〉横浜市立中山小学校（当時）大滝　文平


なにもない授業から…

Y

それは、五年生の時だった。あまり手を挙げようとしなかった私。「はずかしい」「あっているか不安」それを理由にしてあまり意見を言おうとしなかった。でも私は、意見をすこし言えるようになった。社会科の八丈島の学習で、くさやが八丈島でつくられる理由について、調べたことをまとめて、「お宝資料」をつくり、みんなへ伝えた。その時に、とても達成感を感じた。そして、みんなも同じように伝えようとしている姿が多くなっていくのを見て、その思いはいっそう強くなった。

六年生になり、五年生の時に学んだことを、大切にしても、と意見が言えるようになりたいと思った。そんなある日、「ずい道」という、うす暗く落書をがたくさんある所をクラスみんなで通った。「ここをキレイにしたい」と思った。いっもお世話になっている地域の方へ恩返しができるとてもいい活動だと思った。でもこの活動はみんなの意見を言わないと始まらないから、いっも以上に、意見を伝えていこうと決心した。だから目標を立てた。ずい道の学習もふくめて、五回意見を言う。最初のころは、なかなか目標をこえられなかった。でも一回二回三回と手を挙げる回数を増やしていき、最近では五回をこえられる日が増えてきた。これは私だけじゃなく、みんながそうなっていると、感じる。

意見が言えるようになったおかげで、いろいろな場面で、みんなに声かけができるようになった。多分それは、意見を言えて、自分に自信がついてできるようになったと思う。このようなことができたおかげで、自分は大きく成長したと感じる。私も、他の人が成長できるような、空気をつくっていきたい。

◀Yさんの卒業文集より
題名「なにもない授業から…」

卒業文集

Prologue：1　Yさんのこと

休み時間は決まったグループで過ごすことが多く、進んで話すタイプでもない様子です。年度初めの係活動決めや委員会活動を決める学級活動では、リーダー等に立候補することはないものの、自分の希望の活動に入っている様子です。そして真面目に学校生活を過ごしている感じでした。担任として、特に気にかけなくても何事もなく過ごしていく子、今までもそのように過ごしてきた子、と思われます。担任をしていて多くいる感じの子ではないでしょうか。

Prologue：2　意外な姿が現れてきた！

学級全体が発言する子としない子がはっきりしている様子を感じ取っていた中で、あまり発言する子ではないYさんの意外な反応が見えてきました。朝の会「先生の話」で自分の身近なことについて話していると、

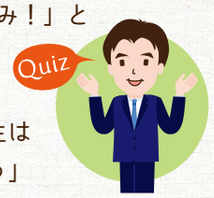
「へー、それで先生どうしたの？」

Yさんからこのような声が聞こえてきました。授業中には、友達の発言や教師の話を一生懸命に聞く姿やノートを丁寧に取るYさんの姿が見て取れます。おそらく朝の会ではノートを取る必要がないために聞くことに集中できること、「授業」という緊張感がないことから、自然な声が出てくるのでしょう。この姿を授業場面で発揮して欲しいと私は願いました。

子どもの姿を通した教材研究のポイント①
日常の見取りと学びを関連付けて、その子の学びの願う姿をつくり上げる。

Scene 1　朝の会の反応を生かす導入！

朝の会での自然な反応はYさんを含め全体的に見られます。だからこそ、この時間を生かそうと考え、「大滝先生の夏休み！」と題したクイズを出しました。



〈1枚目〉

大滝「この写真を見て。先生はどこに行ったでしょう」

「ハワイ？」
「先生が海外？」
「軽自動車があるから日本だよ」
「沖縄だ！」

〈2枚目〉

大滝「自動車のナンバープレートよく見てね」

「えっ！『品川』って書いてある」
「沖縄っぽいけど」
「まさか『東京』？」
「こんな場所ある？」

すると、地図帳を引っ張り出して探し始める子が出てきました。このようにして八丈島と出会いました。

子どもの姿を通した教材研究のポイント②
導入だからこそ、子どもが関心を持って材と出会えるよう、場の設定と見せ方を工夫する。

Scene 2　単元名「東京都『亜熱帯区』八丈島」
～なぜ「八丈島」を教材にしたのか材の価値～

八丈島に初めて行ったのは大学を卒業してすぐの頃です。椎名誠が著した旅行記が大好きで、その中には八丈島が何度も登場し、私も八丈島に魅力を感じて何度も訪れていました。

そして、台風から暮らしを守る工夫を知り、島で出会った人（後述の「くさや」の職人など）との関わりを通して、「単元化できるのでは」と思い始めたのです。自分の生活経験から単元化に至りました。

授業場面に戻ります。さらに八丈島の写真を紹介します。ヤシの木やアロエなど南国らしい植物、美しい海、子どもたちが八丈島に関心を持ち始めています。

「横浜からどれくらいかかるのかな？」
「名産品がたくさんありそう」
「東京都なのに暑いのかな？」

など、思ったことをつぶやく姿が見られます。この時間が大事ですね。

この単元名は八丈島旅行ガイドのキャッチコピーでもあります。毎時の板書に書き入れます。

Scene 3　八丈島が見えてきた！
～クラスに広がる主体性の輪！～

島の位置や形、気候、名産品、歴史や文化など、子どもたちが調べてきたことが次々と伝えられます。板書をしていて、書くところに困るほどのうれしい悲鳴です！私は、調べ学習を活性化するために「お宝資料」という手立てを取り入れています。

「お宝資料」
- 調べた物を朝の時間（例えば8時20分）までに教師のところに持ってくる。
- 教師がクラスの人数分を印刷する。
- 授業が始まる前にみんなに配るもよし、授業中に指名された時に配付するもよし。

授業中に「私の『お宝資料』を見てください。これによると～」と、自分の調べたことを根拠にして考えを伝えることができます。また、朝持ってくることで、子どもの調べ学習の見取りをすることができます。さらに、発言に自信が持てない子への助言もできます。

Yさんがそうでした。「お宝資料」を持ってくるものの、どこをどのように伝えてよいか悩む時がありました。この手立て、今ならタブレットを使うのも効果的ですね。

子どもの姿を通した教材研究のポイント③
「お宝資料」を通して、調べ学習の見取りと本時の授業展開を構想する。

Scene 4 学習問題に挑むYさん
～なぜ「くさや」が八丈島でつくられるのか～

学習が進むごとに八丈島での暮らしの工夫が見えてきます。単元の後半の学習問題は八丈島の特産品である「くさや」に関するものです。くさやをご存じですか？八丈島産のムロアジやトビウオを干物にしたものです。これが、名前の通り強烈な匂いがします。

このくさやが八丈島を始めとする伊豆諸島でつくられるのですが、魚があれば日本のどこでもつくることができるのでは？という子どもの考えが学習問題になりました。さあ、どうやって調べればよいのでしょうか。Yさんは粘り強く調べます。「お宝資料」づくりも意欲的になり、発言に自信を付けていきます。

今回の学習問題では、調べるのに苦戦する子が多い中、Yさんは「くさやと八丈島の気温」の関係に着目していることが「ふり返りのノート」の記述からもわかりました。同じように考えている子が、もう一人います。この視点を称賛し、調べ学習をさらに促すように支援しました。

子どもの姿を通した教材研究のポイント④

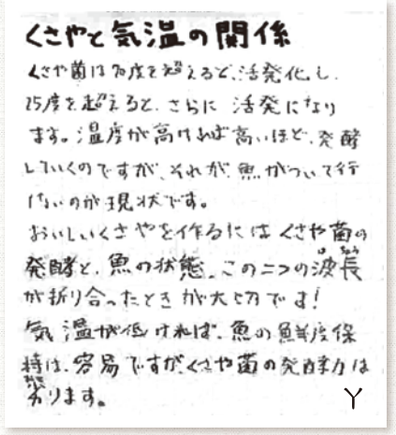
「ふり返りノート」から子どもの思いを見取り、具体的に調べ学習の視点を助言する。

Scene 5 お宝資料が発言を支える！
～さらに広がる主体性の輪！～

本時の日の朝です。Yさんが「お宝資料」を持って、私のもとへやって来ます。さらにもう一人の子が、八丈島の年間気温を調べてきました。

Y「このことから、八丈島は年間を通して暑くなりすぎず、寒くならないのでくさやづくりに適していることがわかりました」

という発言につながったのです。



くさやと気温の関係

くさや菌は10度を超えると活発化し、25度を超えると、さらに活発になります。温度が高ければ高いほど、発酵していくのですが、それが無かって行ないのが現状です。

おいしいくさやを作るには くさや菌の発酵と、魚の状態。この二つの波長が折り合ったときが大切です！

気温が低ければ、魚の鮮度保持は、容易ですが、くさや菌の発酵力は弱ります。

Y

◀Yさんのお宝資料

子どもの姿を通した教材研究のポイント⑤

「お宝資料」をもとに、考えの根拠を明確にする助言が説得力のある発言につながる。さらに、その姿を称賛する。

Epilogue 学びを通して自信を持ったYさん

「みんな、話を聞こう！」この学びの後、Yさんはクラス全体にこのような声かけをする姿が目立つようになりました。その姿は卒業まで続きました。学びを通して得た「達成感」が自信になり、さらに意識は他者へと向かったのです。

冒頭の作文、最後の段落に「他の人が成長できるような空気をつくっていきたい」と書かれています。学校生活の基盤である「学習」が、学習面での学びだけでなく、生き方につながる学びになるのです。このYさんの変容した姿から改めて授業の大切さに気付かされました。

◆ 今回のエッセンスポイント

●子どもの学びの姿を想像した教材研究！

今回の分析は　横浜市立中山小学校　引田雄士です。

「もっとみんなが発表しないとだめだよ」
「最初の説明はわかりやすかったけれど、2番目の説明がわかりにくいから、もう一度言える？」
「説明が難しかったら、自分が説明するよ」

大滝先生クラスの子どもの言葉です。今まで聞いたことのない子どもの言葉がたくさん出てきました。そんな子どもの姿を見て、授業に引き込まれていきました。

「vol.02(前号)」の冒頭で登場したHさんも前年度(5年生時)は自分が担任でした。Hさんの発表の内容やつぶやき、眼差し、5年生では見られない姿でした。そんな子どもたちを見て、「こんな子どもを育ててみたい」と思った時のことを今でもよく覚えています。

大滝先生は子どもの実態をつかむことをとても大切にしています。この号の中でも、Yさんが「あまり発言する子ではない」という実態をしっかりとつかんでいます。そして、「自然な声が出てくる姿を授業の場面で発揮して欲しい」という、その子の学びを願う姿をつくり上げていきます。その姿をもとにして教材研究を行っているのです。願う姿を想起した単元構想だからこそ、導入の工夫や「お宝資料」の具体的な助言が展開されるのです。卒業文集に授業場面があのように表されること、授業者としてこの上ない喜びに違いありません。

みんなで楽しく学ぼう！ 先生たちの勉強の場(今年で6年目)紹介！
社会科を中心とした、子どもが主役の学びを創造し合う場。それが「北学場(きたまなば)」

横浜市北部(青葉区、都筑区、緑区、港北区)の社会科有志が中心となって発足した、緩やかな勉強の場です。発足して6年目になりますが、今では、横浜市内・市外の初任者を初め、経験の浅い先生、中堅・ベテランの先生、管理職やOBの先生などなど、あらゆる立場の先生方がフラットな関係で、ざっくばらんに語り合っています。ご興味がございましたら、連絡(メール)をいただければ、案内のチラシを送らせていただきます。

私と北学場(参加者の声より)

「北学場」には、様々な学校のいろいろな立場の先生方が来られます。今年度のいちばんの発見は、社会科の授業展開です。授業の進め方が変わったことで、まったく発言しなかった子が発言するようになったり、自主的に調べてくる子も増えたりしました。また、社会科だけでなく、他の授業や日々の学校生活につながってくることも多く、いつもたくさんの刺激をもらえています。

北学場
〈連絡先〉大滝 文平
bunpei_o@yahoo.co.jp

教材研究は楽しみながら！

YUKIKOの部屋

Check point!

Q 教材研究（取材）で心がけていることは？

A　自分で教材研究をする、というのは簡単なことではないですよね。時間がなかなか取れなかったり、アポイントメントをとって人の話を聞くことに不安があったり…。

私が初めてしっかり教材研究をしたのは、初任時３年生の社会科でした。横浜についての知識がほとんどなかったため、職場の先輩にアドバイスをいただき、地図を見ながら学区を歩きました。そうすることで、公園や橋、駅、人など、地図だけではわからない「まち」の様子が見えてきました。それでも、それは私の印象でしかありません。その後の単元も見据えて、地域の店の方にお話を聞きに行きました。勇気を出して質問をすると、自分が知らなかったまちや、まちの方々の素晴らしさを感じることができました。

まずは自分でとことん調べること。今はインターネットでも様々な情報が得られます。次に、詳しい人（その仕事に携わる方、地域の方々）や自分以外の人（同僚、家族、友達など）と話をすること。人と一緒に考えることで、自分が知らなかったことや、新たな考え方を知ることができます。

みなさんも、楽しみながら教材研究をしてみてください！

（横浜市立本牧小学校　武藤 由希子）

「楽しい学び de クラスをつくる」では、
みなさんからの質問をお待ちしています！
〈連絡先：北学場〉　bunpei_o@yahoo.co.jp

※本冊子に掲載しているイラストはすべてイメージです。

楽しい学び de クラスをつくる（vol.03）

日文 教授用資料

令和5年（2023年）3月31日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33655

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690